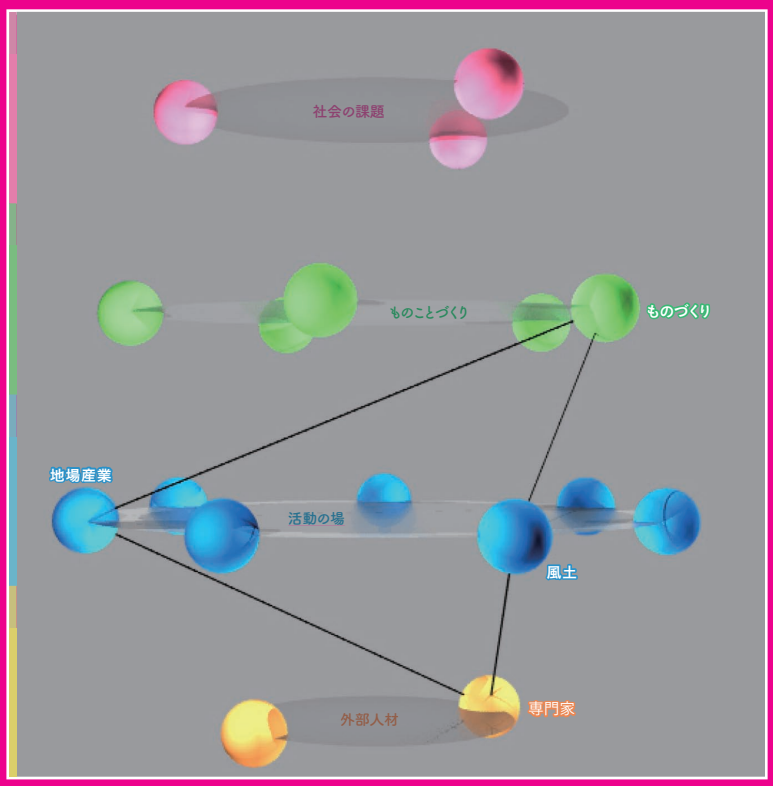


Simple Forest

主催団体／Simple Forest

【団体概要】

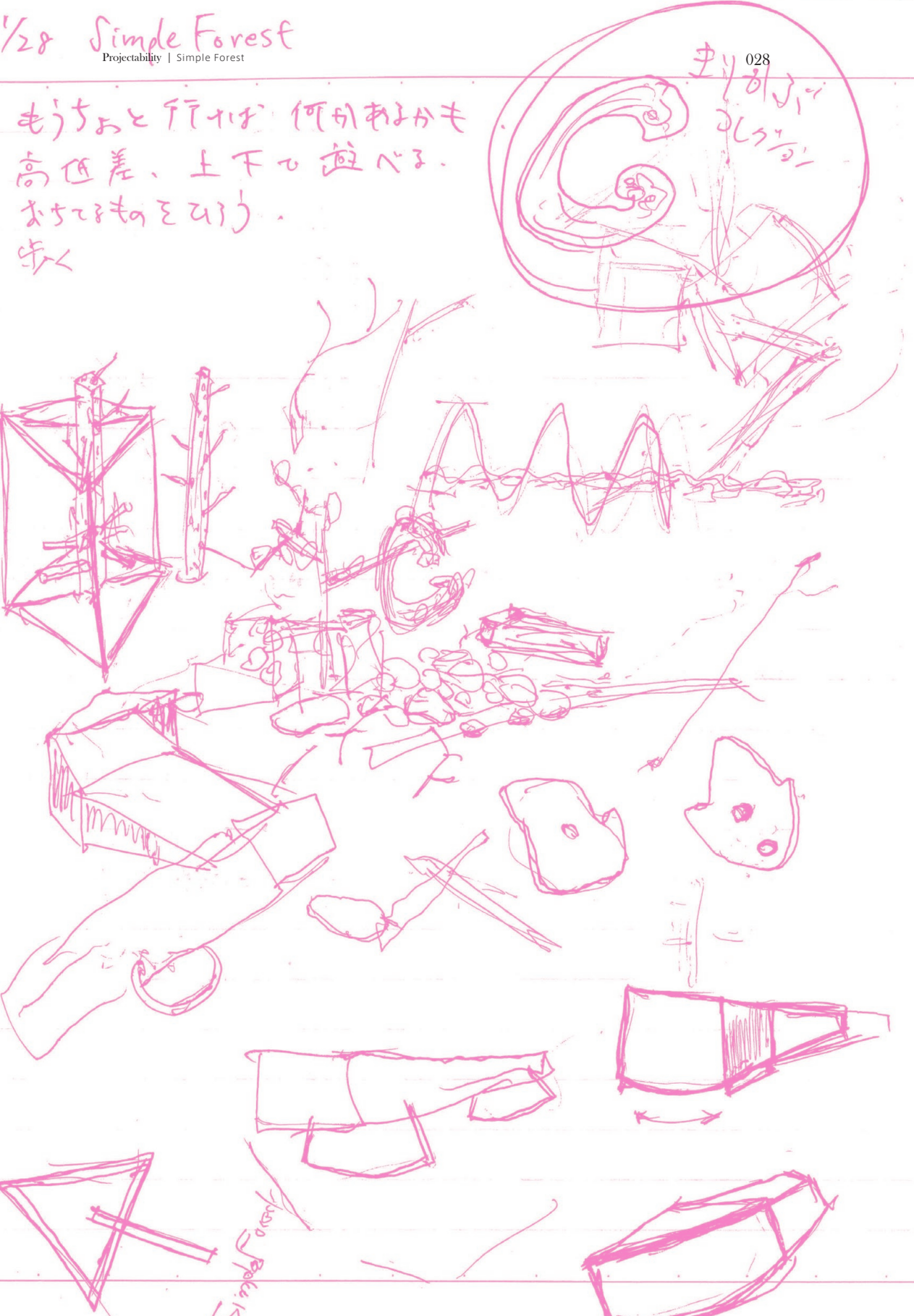
天竜の山で仕事をするきこり、林業従事者と、日常的に山に接点のない木工作家、アーティスト、OLなど異業種の集まった任意団体。仕事場、生活の場として山や森に向き合う知識や知識に裏付けられた視点と、門外漢の視点を混ぜ合わせた議論を繰り返し、山や森に対してさまざまな角度から焦点をあてたプロジェクトを展開している。

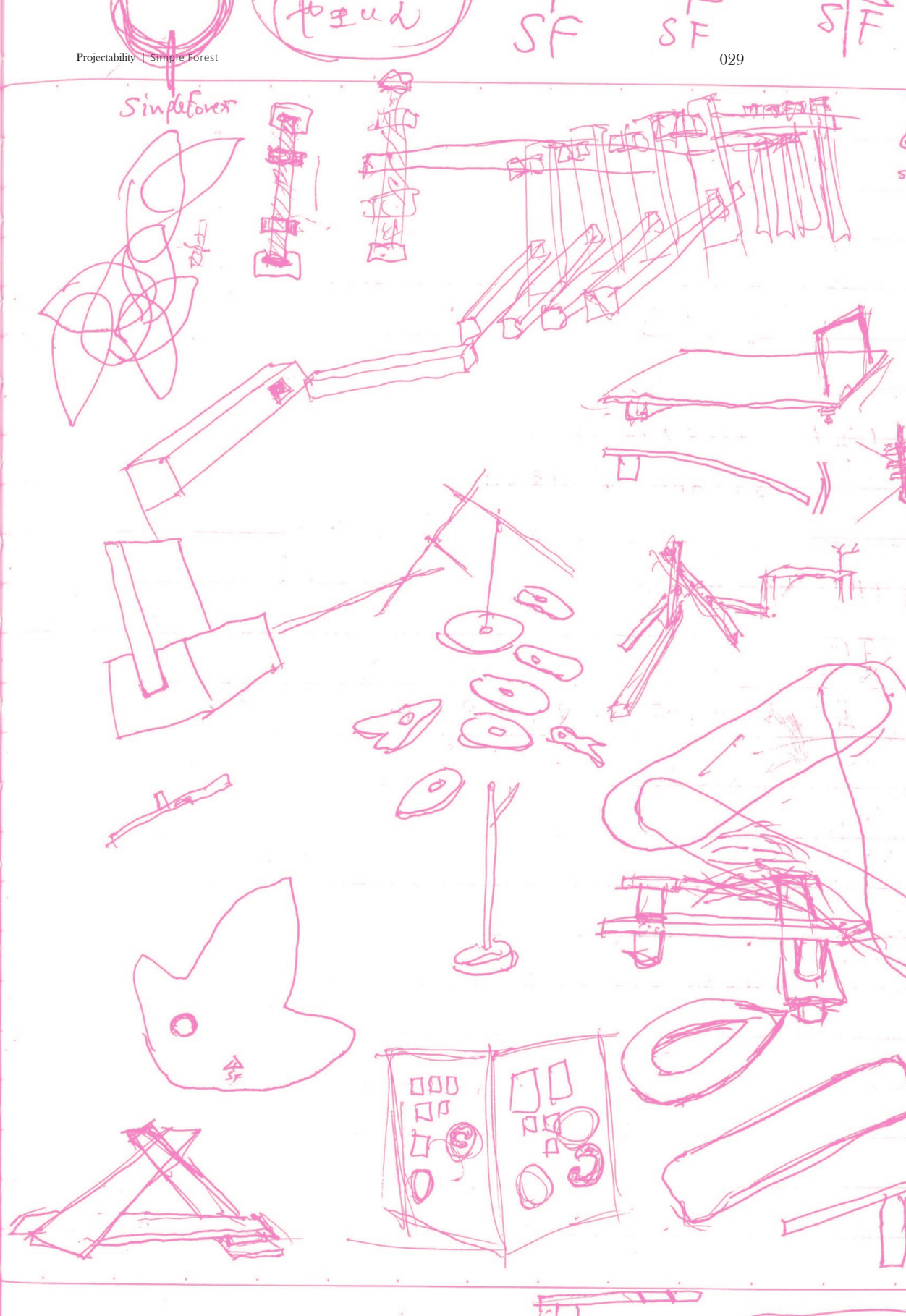
http://www.facebook/simpleforest

【事業概要】

立ち上げ初年度であった2012年には、「人の創造力を刺激する山の環境」を反映した遊具づくりを行った。人それぞれに遊び方、過ごし方が違い、受け取るものも違う、という山の環境そのものに着目し、遊ぶ人それぞれに合わせて形を変え、受け取る印象に幅を持たせた遊具の制作プロジェクトを実施。翌2013年は「音」に焦点を絞り、参加者が山でサンプリングした音を編集し組み合わせた音楽を制作。毎回の成果物を発表するための、来場者が自由に過ごせる遊び場をつくり出すイベント「One day playground」を、この年はライブ形式で開催。

もうちょと行けば 何かあるかも
高低差、上下で遊べる。
おちてるものをひろう。
歩く





Simple Forest はたいへん明解なアウトプットをしている一方で、非常に難解なプロジェクトだ。「山」「森」に関わるプロジェクトとして、１年目は遊具を制作した。そして２年目は音楽をつくった。

遊具は、板に穴が１つまたは２つ、そして円柱型の短い棒が突き出ていて、他の板の穴にすっぽりはまり込むようになっている。３種類の長さがあるその遊具は、自由に組み合わせることができ、上に乗って歩くと微妙にバランス感覚を揺さぶってくる。

音楽は、子どもや人の声、細かい砂利の上を歩く音、木を燃やす火の音などが聞こえだし、次第に電子音が静かに混ざってくる。フィールドレコーディングをベースにしてつくられた曲だ。

人の創造性を刺激する山の環境を反映した遊具。音の観点から山に目を向けてみた結果の音楽。プロジェクトを進めた林業従事者、アーティスト、木工作家、音楽家らが幾度もの対話を重ねてつくり出されたものだ。

Simple Forest は“ものをつくり出すプロジェクト”なのだろうか？ メンバーで、コミュニティアーティストのホシノマサハルさんがこんなことを言っていた。

「Simple Forest をずっとやりながら、街の人が森に行くんだよ、森の人が街に出てくるんだ、そこをうまく繋げるように、今年で２年目。でも、ひとつ気がついたんですよ。僕は森に入ってない。つまり、素足で道のない世界を歩んでないんです。素足で道のない世界、森の中に入ったら、僕は多分出てこれなくなります。そういう世界がきっと森なんです。森のことを、単純に道のつながりとして考えていると、大きくずれるぞ、というふうに考えているんですね。だから、本当の森って人を寄せ付けないものだという前提があります。そういうところに、まだ解ききれないところがあるから、もうワクワクするんですよ。森の感じって」。

「それは境界線がキーワードになるんですけども、そのためには、自分の中で新しい問い立てをし続けなきゃいけない。Simple Forest って、『ミーティングプロジェクト』なんですよ」。

一方で、林業従事者であるきこり達の話には、産業への意識、経験の知がある。

例えば、強く美しい木をつくるために、100m × 100m の土地に対して 3000 ～ 5000 本というかなり多い数の苗を植える、という話がある。100 年後できあがる数百本の木のために、成長に敢えて負荷がかかる環境をつくるのだという。均質な年輪の美しさはもとより、目の詰まり具合が強度に関わることを前提とした育て方だ。そして、寒い時期に育った分は黒い年輪となり冬目といい、暖かい時期の分は白くなる。昔から山を育てる人は、柔らかい白い部分を黒い部分が締めできていることを知り、製品として切り出す時に年輪を何本入れるかまで考えた育て方をしているという。それは、建材として切り出すことで、大きな産業を成り立たせてきたことからつくられてきた知恵だろう。しかし大きな産業に対する視点だけでは語れないことが出てくる。そのひとつは信仰のようなものだ。

山や森のことを正しく伝えるため、TENKOMORI（天竜これからの森を考える会）という活動もしている林業従事者である、山田さん、前田さんが話してくれた。

「他の仕事に比べれば、信心深い人は多い気はする。新しい現場に入る時に神様を祀る人がいたり、その他守られている言い伝えもある。例えば、『神様を祭る“山の講”の日は、神様が木の本数を数える日とされ、間違って数えられると木になっちゃうから、山に入ってはいけない』というのは今でも守る人もいます」。

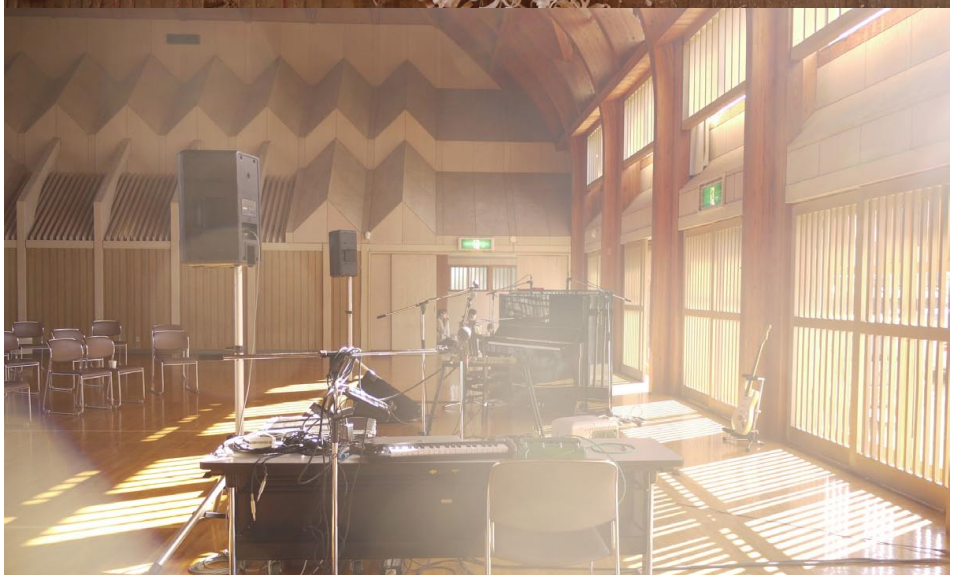
もうひとつは、街の人、山に日常を置かない人の価値観の新鮮さだ。

「街の人と山で話してると、『この腐ってる部分ください』とか、『この枝の出てる部分ください』とか言われるんですよ。多分それは、山のおじいさんたちにはまったくもって理解できない」。

産業も、信仰も、気付きも、違いも、遊びも、暮らしも、山にまつわるすべてを“ある”ものとして捉え、未来に希望を持った多様な会話を繰り返し、その都度の動向を人に開いていてゆく、というのが Simple Forest の活動だろうか。

『今時シンプルな遊びって、求めないと手に入らないのかも』

これは、Simple Forest 主催のイベントに来た参加者の感想だ。それを受けてホシノさんは言う。「山の中に行くことだけが目的になると、その中で何をするかというのはとても想像力を持たないと遊びきれないわけですね。本当は何もないということが、どれだけ豊かな想像力を育てる栄養になっているかということなわけですよ」。（Su）



Simple Forest 2012 遊具づくり
遊具制作／中澤聡子（木工作家）
ワークショップ講師
押し葉づくり／ホシノマサハル（コミュニティアーティスト）
人形づくり／スサイタカコ（アーティスト）
油粘土造形／柏原崇之（TEN-TO）（木工）
お箸づくり、チェーンソウ実演／TENKOMORI（天竜これからの森を考える会）

Simple Forest の project 02 “音”
音楽制作／Taishi Kamiya
ワークショップ講師
冊子づくり／柏原崇之（TEN-TO）
落ち葉を見る／ホシノマサハル（コミュニティアーティスト）
ライブ出演／Cuushe、Neohachi、Zmi
音楽家コーディネート／folklore forest